

## イギリス ヴィクトリア朝時代における 環境保護運動についての考察

--- オクタヴィア・ヒルとウィリアム・モリスの場合 ---

竹 多 亮 子

イギリスが最も繁栄したといわれる産業革命後 100 年を経たヴィクトリア朝時代中期に、二人の傑出した思想家が登場し、彼らが今日に至るまで、特に住環境、自然環境問題に大きな影響を及ぼした。一人は、現在世界中に展開しているナショナルトラスト運動の開祖の一人であるオクタヴィア・ヒル女史 (Octavia Hill, 1838-1912) であり、もう一人は、現在でも意匠デザイナーとして高い人気を誇るウィリアム・モリス (William Morris, 1834-1896) である。当時のイギリスで、同時期にこのような思想家が現れたことは偶然ではなく、工業発展、都心への人口集中、それらに伴う環境破壊と大いに関係がある。これらは今日における環境破壊と何ら差異はなく、産業の発展と自然破壊との連鎖という同じ問題を孕んでいる。この論考では、オクタヴィア・ヒル、ウィリアム・モリスのそれぞれの思想背景、活動経緯について比較検討し、現代につながる環境問題への取り組みの原点がどのようなものであったのかを考察したい。

### オクタヴィア・ヒルの場合

「この新しい団体にはトラストという名を付けたい」—— オクタヴィア・ヒル

1838 年 12 月 3 日、オクタヴィア・ヒルは、銀行業と穀物・羊毛取引業を営んでいたジェイムズ・ヒルと学校教師のキャロラインの間に、三番目の子供として生まれた。自由主義的で進歩的な裕福な家庭であったが、周期的な金融恐慌のため、自分の銀行のとりつけ要求に応じることができずに、父親は 1840 年に破産宣告を受けた。かつて住み慣れたクィーン・アン・ハウスは人

手に渡り、経済的な理由から、子供たちは母方の祖父母の世話になることになったが、オクタヴィアはこの祖父から大きな影響を受けることになる。祖父のサウスウッド・スミス博士は、かつてユニテリアンの牧師であったが、後に医者となり、イースト・ロンドンの伝染病病院で働いていた。そしてそこで彼は、伝染病の主な原因が接触伝染ではなく、スラム街の家屋、人口過密、粗悪な衛生施設、そしてきれいな空気とオープン・スペース<sup>1</sup>の不足であることを認識したのである。オクタヴィアは彼のもとで、医学報告書や法律の抜粋を写すのを手伝い、このことで彼女は、ヴィクトリア朝時代における都市の住環境の貧困に初めて気付いたのである。1851年に母親のキャロラインが、女性のための、学校と手芸の仕事場が一緒になった共同ギルドの経営を引き受け、14歳のオクタヴィアも、この貧民学校の女の子たちの世話を手伝った。そこでは裕福な人々の子供たちのために玩具を作ってわずかな賃金を得ていたが、衛生管理、栄養不良や病気など、玩具労働者たちのひどい状態の現実を、オクタヴィアははっきりと理解するにいたったのである。そして彼女は、玩具の生産と販売を上手く処理し、女の子たちに読み書きを教え、昼食を準備し、さらに週末にはロンドンの入会地<sup>2</sup>での散歩を計画するなど、彼女たちのために熱心な活動に入っていた。その頃、三十代半ばで既に美術評論家として名のあったラスキン（John Ruskin, 1819-1900）と出会うのである。彼が新しい手芸の作品を探しにギルドを訪ねてきたときである。そしてその後オクタヴィアは彼に師事し、その芸術思想の影響を受けるが、彼はオクタヴィアの良き理解者でもあった。ラスキンから、相続した財産から彼女に資金提供の申し出があり、オクタヴィアはそれを借り受け、1864年に彼女の大規模な住宅改良計画が開始された。そして、メアリボーンで最も荒廃していた地所の中のパラダイス・プレイスで、三つの家屋を買ったのである。そこは、漆喰が壁から剥がれ落ち、階段には雨よけのバケツが置かれ、料理も洗濯も同じひとつの小さな部屋でしなければならないような所で、裏庭の舗装はすべて壊れ、汚水は垂れ流しであった。これらの乱雑で湿気が多く不潔な家屋を改修し、排水し、舗装して、わずかな空き地は子供の遊び場にし、花や低木を植え、さらに、間借り人が部屋をきちんと片付けていれば部屋代を割り引いたりした。また子供たちのために、フレッシュウォーター・プレイスでは、がらくたと喧嘩が常であった非衛生な農場が綺麗にされ、管理された遊び場に変えられた。ゴミが投げ入れられたり、レンガが盗まれたりといった抵抗がないわけではなかったが、この子供たちのためのオープン・スペースの確保の成功が、オクタヴィアの住宅改良計画としてまもなく知られるようになり、その計画のために資金を提供しようという申し出が数多く寄せられるようになったのである。1870年代までには、オクタヴィアは自分を手伝ってくれる他の女性たちを訓練する必要性を感じはじめ、その教育にも着手する。彼女の意見に賛同して手伝うだけでなく、衛生面や経営・法律面での専門的な知識をもち、イニシアティブが取れる人材が必要だと認識したからである。彼らはまさに、現代的な意味での最初の“ソーシャル・ワーカー”といえる。

オクタヴィアの『ロンドンの貧民の住宅（Homes of the London Poor）』（1875）と題する論文が法律制度に影響を与えるなど、彼女の住宅計画は一般に認められるようになった。そして更に、都市計画のもっと幅広い問題に目を向けるようになるのである。彼女が、絶対に保存すべき

だと考えたスイスコテージ・フィールドとパーラメント・ヒルの下の牧草地が、ある建築業者に売られており、それを救うために入会地保存協会（Commons Preservation Society, 以下 CPS と略）<sup>3</sup> に相談し、そこでロバート・ハンターに出会う。そして、このような広いオープン・スペースを保護するには、この土地を購入するために寄付をしてくれるように大衆にアピールする方法しかないことを確信するに至る。そして「タイムズ」紙の寄稿欄を通じてアピールし、三週間ほどで目標額のほとんどもに達したが、ほんの数日の遅れでこの計画は失敗に終わってしまった。しかし、この不成功の重要な結果は、オクタヴィアが CPS に加わったということであった。入会地に関する議会での論争に巻き込まれたりしたが、協会の影響力は増していく。1876 年の入会地法案に対応して書かれた論文には、「田園地帯へのアクセスが、都市や工業環境の中で生活し、そして働いているすべての人々の福祉のために絶対に必要である」<sup>4</sup> と述べられている。そしてその後、地方自治体および政府の基金によりオープン・スペースが確保され、公園が創設されていくのである。地方自治体によるオープン・スペースの購入と所有が、CPS の重要な方針となり、オクタヴィアはその先頭に立っていった。また美化普及協会の設立を提案し、それがきっかけとなり、「カール協会（Kyrle Society）」<sup>5</sup> が発足し、ロバート・ハンターはその法律顧問を無給で引き受けた。彼らは、ロンドンの貧民区域の住宅や環境の美化と、オープン・スペースの確保を推進し、さらに当時のロンドンの煤煙による大気汚染問題にも関与したのである。そして、イギリス湖水地方で 10 年にわたって自然保護運動を続けていた牧師のローンズリー卿が、ラスキンによりオクタヴィアに紹介され、オクタヴィア・ヒル（1838-1912）、ロバート・ハンター（1844-1913）、ハードウィック・ローンズリー（1851-1920）という三人の博愛主義者がそろう。それぞれに活動が続けていたが、主に議会に対する働きかけと国民への啓蒙活動が中心で、所有権絶対優位の時代背景の中では、その成果にはおのずと限界があると感じていた。ハンターは CPS での経験をもとに、現行法律を慎重に検討した結果、単なる啓蒙のためのボランタリーな団体ではなく、確固とした基盤を持つ法人組織の必要性を確信するのである。オクタヴィアの「この新しい団体にはトラストという名をつけたらどうでしょう。カンパニーよりトラストと呼ばれる方がいいと思うのです。営利目的よりも慈善的な性格を前面に出した方がいいと思うからです」<sup>6</sup> という提案がなされ、これがナショナル・トラストの命名のエピソードとしてよく知られるようになるのである。その後も三人の努力と活動が続けられ、1894 年 7 月 26 日、ロンドンのグロヴナー・ハウスに関係者が集まり、ウェストミンスター公爵（the Duke of Westminster）を議長に、設立総会が開かれた。そして翌年の 1895 年 1 月 12 日、国民のために土地と建物を買収し、保管することのできる非営利法人として、定款は商務省の承認を得、正式に「歴史的名勝および自然的景勝地のためのナショナル・トラスト」が発足した。翌月に第一回幹事会が開かれ、初代会長にはロバート・ハンターが選ばれた。正式発足後も、オクタヴィア・ヒルを始めロバート・ハンター、ローンズリー卿の三氏の熱心な活動が展開され、更に発展していくのである。

こうしてナショナル・トラストは、現在、イギリス国内で約 248,000 ヘクタール（612,000 エーカー）以上の景勝地と、約 600 マイルの海岸線、200 以上の建築物を所有・保管する環境保護団

体として活躍し、その影響は世界各地におよび、それぞれの地でナショナル・トラスト運動が展開している。

### ウィリアム・モリスの場合

「これら遺跡の監視・保護を目的とする協会を一刻も早く発足させることは、一体、何かの役には立たないものだろうか。」——ウィリアム・モリス

1834 年 3 月 24 日、父・ウィリアムと母・エマの間に三番目の子供として、ロンドン東北郊外のウォルサムストウに生まれたウィリアム・モリスは、父親が実業家で銅山の株を所有していたこともあり、幼年時代から裕福で何不自由のない生活をおくった。6 歳のときにさらに大きな邸宅、ウッドフォード・ホールに移り、読書好きで聡明であったモリスは、7 歳までにウォルター・スコットの小説を読破していたと言われている。また屋敷の庭園の奥に広がるエビングの森で、中世騎士ごっこをしたり自然観察をしたりと、後にモリスの芸術の基礎となる、中世ロマンスへの傾倒や自然への愛などが育まれた。この頃から、装飾芸術に生涯熱中する素地ができていたのである。比較的自由的な少年時代を過ごし、19 歳でオックスフォード大学エクセター・カレッジに入学したモリスは、ラスキンの著作に出会い、その思想の影響を強く受ける。それ以前から中世ロマンスやゴシック建築には興味を持っていたが、中世の芸術や社会制度を推奨するラスキンの思想と融合され、それが生涯にわたりモリスの芸術思想の根幹となるのである。多感なオックスフォード時代に、生涯の友となるエドワード・バーン・ジョーンズ (Edward Burne-Jones, 1833-98, 画家・ステンドグラス、タペストリーのデザイナー)、チャールズ・フォークナー (Charles Faulkner, 1834-92) らと出会い、建築やデザインに興味をもち、聖職者への道から建築家へと方向転換をはかる。そしてジョージ・エドムンド・ストリート (George Edmund Street, 1824-81, 建築家) の建築事務所に弟子入りし、そこでフィリップ・ウェブ (Philip Webb, 1831-1915, 建築家・デザイナー) と知り合い、彼もまたモリスの生涯の友となるのである。ストリートの事務所では、彫刻・粘土細工・木版画・写本の装飾・装飾文字なども手がけた。さらにラファエル前派<sup>7</sup>のダンテ・ガブリエル・ロセッティ (Dante Gabriel Rossetti, 1828-82, 画家・詩人) やラスキンとも出会い、一時期ロセッティのもとで画家を志した。そこでモデルをしていたジェイン・バーデン (Jane Burden, 1839-1914) と知り合い結婚するのである。結婚のための新しい家作りを友人たちに依頼し、家具・ステンドグラス・刺繍などを皆で手がけたことから、芸術装飾家の商会を設立すべきとの提案がなされ、その結果、モリス 27 歳の 1861 年に装飾芸術工房であるモリス・マーシャル・フォークナー商会 (Morris, Marshall, Faulkner & Co.) が設立される。彼らの芸術作品は生産量が限られていたことと、職人的技能が強調されたため極端に高価なものとなり、そのため商会の収入基盤は教会の家具類とステンドグラスとなった。その

後 1875 年、商会はモリス単独の経営によるモリス・アンド・カンパニー (Morris & Co.) となり、モリス没後もモリス商会として 1940 年まで存続する。1877 年に、ロンドン随一のショッピング街にショールームを開設し、1881 年にはマートン・アビィにカーペット・織物類・チンツ<sup>8</sup>のプリント製作のための新工場を開いた。この時期、商会は急速に発展を遂げたが、モリスはデザインを主に手がけ、経営面はビジネス・マネジャーであるジョージ・ウォードル (George Wardle) にまかせるようになる。モリスが社会活動に興味と時間を割くようになるのもこの頃であり、彼の芸術思想についての講演も数多く行っている。

1877 年、建築家ギルバート・スコット (Sir George Gilbert Scott, 1811-78) は、グロスターシャーにある中世建築テュークスベリ・アビィの修復用の図面を用意していた。モリスはこの提案に対し、「わが国は、古の建築物のおかげでかつて大いに名声を博していたのだが、そうした建物の遺跡のなかにかろうじてまだ残っている美しいもの、あるいは歴史的なものを、もはや救うことはできないのだろうか。これらの遺跡の監視・保護を目的とする協会を一刻も早く発足させることは、一体、何かの役には立たないだろうか。こうした遺跡は今では数少なくなってしまったが、それでも依然すばらしい宝なのであり、新たに生み出された方法で生きた歴史を学ぶことがわれわれの多くにとって主要な喜びとなっているこの時代にあって、なおさらそれらは計り知れない貴重なものとなっている」<sup>9</sup>と書き、この抗議の手紙がロンドンの文芸評論誌「アシニアム」(Athenaeum, 1828-1921) に掲載され、それが契機となり「古建築物保護協会 (Society for the Protection of Ancient Buildings, 以下 SPAB と略)」が設立されるのである。さらにモリスは同誌への投書に「わが国の建築家たちの仕事の進め方は無鉄砲極まりなく、この三十年ほどの間に彼らは中世の芸術と歴史の貴重な遺跡を自分たちの実験のためにただの石塊に変えてしまった」<sup>10</sup>と書き、建造物の安定性に疑問があるなら技術者に調べさせ、できる限りの補強をすべきだと主張した。すぐに支持者が集まり、最初の年次総会が 1878 年 6 月 21 日に開かれ、委員会の創立メンバーには、トーマス・カーライル (Thomas Carlyle, 1795-1881, スコットランド生まれの評論家・思想家・歴史家)、ジェイムズ・ブライス (James Bryce, 1838-1922, 法学者・政治家・歴史家)、ジョン・ラボック卿 (Sir John Lubbock, 1834-1913, 銀行家・政治家・自然史研究家) など、影響力をもつ名士たちが数多く名を連ねた。モリスはこの組織の中で保存計画にアドバイスをするなど活発な活動を行っていく。

ヴィクトリア朝中期には、様式の統一を図るため、イギリス全域にわたって大聖堂と教区教会を再建するという、“修復”という名で知られた社会現象が発生した。モリスはこれに激しく反対したのである。彼の反対攻撃に対して修復派側は、テュークスベリで進行中の工事は目的は“もとの状態”に修復する事、つまり後世の付加部分を取り壊し、その建物の当初の部分の様式で再建することであると主張した。当時、中世の教会は長い間放置され、補修もされず老朽化が進み、そのままでは倒壊する危険性もあったのである。しかし、それらを皆同じようなやり方で、つまり教会の風化した石造部分を削り取り、滑らかな表面に変えてしまうというやり方で統一する必要はなかったのである。モリスは SPAB の設立宣言文の中で「これは単なる偽造であり、



修復という名のもとでなされた変更は無駄な労力の結果であり、くだらない生気のないものである」<sup>11</sup>と批判している。またパンフレットとして出版された『芸術の目的 (The Aims of Art)』の中で、「芸術は豊麗なものも貧弱なものも、誠実なものも空虚なものも、いずれにせよ、その芸術の存在している社会の表現であり、そうあらねばならぬのだ」<sup>12</sup>と述べた。モリスにとっては、まさに時代を反映する芸術である建築物が、一様に破壊され形を変えられてしまうことは、我慢できないことであった。それが原動力となり、この協会の設立へと駆り立てられたのである。1883 年マンチェスターで行った講演『芸術、財貨、富 (Art, Wealth, and Riches)』で、「私は、現在および未来の民衆のために歴史的な建物や美しい建物のような、イギリスがもっている財貨を保存することを目的としている無害の小さな協会の会員である」<sup>13</sup>と公言している。そして彼らが、修復という名の“削り取り”に反対したことから、SPAB は「アンチ・スクレイブ (Anti-Scrape)」(削り取り反対) という名で呼ばれるようになる。協会では数多くの事例を処理し、あらゆる時代の建物が考慮されるようになり、モリスはその中心となって活動が続けた。そのためモリス商会のステンドグラス部門の経営が苦境に立つことにもなった。古い教会のステンドグラスの仕事の依頼には、特別の理由がない限りすぐには応じられないことにしたからである。モリスは、古建築物を社会が保護することを要求し、その運動に献身したのである。この後、モリスは彼の芸術論、社会思想論など数々の講演を行い、著作も数多く手がけ、生涯にわたり様々な社会活動を展開していくのである。そして SPAB は様々な環境保護団体に影響を与えつつ、キャンペーンとアドバイスの団体として現在も存続し、イギリス国内の貴重な建築物の保護のための活動を続けている。

「それらの美しい、遠くの静かな場所を、できるならばあなたがたの子供たちのために、そしてあなたがたの子供たちの子供たちのために残しておいて下さい。」—— オクタヴィア・ヒル

「我々だけが、啓発的で由緒ある古建築物を保護し、後の世代に伝えることができるのである。」

—— ウィリアム・モリス

ナショナル・トラストがその前身母体としているのが入会地保存協会 (CPS) であり、その根本原理を得たのが古建築物保護協会 (SPAB) であるというのは、ナショナル・トラスト紹介の中でしばしば出会う表現である。よってその創設者たちがどのようにに影響し合ったのか、という疑問がこの論考の直接のきっかけであった。住宅改良運動を展開していたオクタヴィア・ヒル、CPS で弁護士として活動していたロバート・ハンター、そして湖水地方で自然保護運動を推進していたハードウィック・ローンズリー卿の三氏によりナショナル・トラストが創設された。それから遡ること 18 年、ウィリアム・モリスによって創設され同時期に活動した SPAB。それぞれの団体の創設経緯を見てきたが、個人としての関わりはともかく、オクタヴィアとモリスが組

織を通じて協力し合っていたことが、それぞれの伝記や書簡集からうかがえる。例えば、モリスは1881年1月27日にカール協会の会合でスピーチを行い、「我々の時代、我々の国に現在ある特有の無頓着・醜悪さ・不潔さといった人類の敵と闘うために、カール協会は設立されたのだ」<sup>14</sup>と述べている。そして協会の第三部門である装飾部をモリスが担当し、公共のホールや病室をフレスコ画等で飾る援助をしている。オクタヴィアも施設改良の際、モリス商会の陶器部門であるド・モーガン・タイル (De Morgan Tiles) を選び使用しており、またモリスが1882年夏頃から活動していたアイスランド飢饉救済委員会への援助もした。1882年9月12日付けのモリスからオクタヴィア宛と思われる手紙には、その基金への2ポンドの小切手に対する短いお礼が述べられている<sup>15</sup>。さらにポール・トムスン (Paul Thompson) は1990年のウィリアム・モリス協会での講演で、モリスが1876年から1886年までCPSの委員会メンバーとして活動していたと指摘しており<sup>16</sup>、またジリアン・ダーレイ (Gillian Darley) によると、オクタヴィアは1897年にSPABの名誉会員になっている<sup>17</sup>。個人的にではなく、組織を通じての協力であるが、オクタヴィアとモリスのそれぞれの活動について考えるとき、共通項としてのラスキンの存在に注目する必要がある。その思想の影響を二人とも強く受け、またラスキンを介して共通の知人が数多くいたからである。

ラスキンは、母校のオックスフォード大学で美術史を講じた高名な美術史家であり、かつ文明批評家でもあった。そして、モリスがSPABを創設したのは、中世の職人と建築物に関するラスキンの主張を発展させた結果だともいえるのである。ラスキンは、当時の物質文明を批判し、中世のゴシック芸術を推奨し、人間社会における労働の意味を芸術創造の観点から捉え、建築とそれに関わる工芸に直接携わる職人、つまり労働者の労働の質に重要性があるとした。そして、芸術家を援助し、相互に協力しながら働いていけるような共同社会を築くことを目的としたセント・ジョージ・ギルド (Guild of St. George) を計画するが、これは成功しなかった。このラスキンの労働と芸術に関する思想とモリスの理想が融合され、「私の理解する真の芸術とは、人間が労働に対する喜びを表現することである」<sup>18</sup>とモリスは言う。芸術が労働の喜びの表現であるならば、「すべての人々が為すべき仕事をもつことは正当にして必要なことである。第一にそれは為す価値のある仕事であること。第二にそれは為してそれ自体楽しい仕事であること。第三にそれは過度に疲れさせたり、過度に心を労せしめたりしない条件のもとで為されるべき仕事であること」<sup>19</sup>と主張した。しかし、万人が労働の喜びを感じるには、当時の劣悪な労働環境や住環境では不可能なことであった。階級的不平等が優位を占めるヴィクトリア朝時代のイギリス社会で、万人が芸術家たるためには、労働条件の改善や住環境の整備はモリスにとっては不可欠なことであった。そして現体制での実現が無理だと感じたモリスは、社会主義革命によってその体制を打倒し、新社会を築くという理想をいだき、社会主義者となるのである。しかしそれは、ラスキンが推奨するロマン主義的社会主義とは違い、芸術社会主義と言われるもので、モリスが「美」そのものに最高の価値をおいていたためである。

一方、15歳の頃から10年間ラスキンに師事し絵画指導を受けていたオクタヴィアも、彼の思

想の影響を受け、芸術や古い建築物を愛し、自然の風景の美しさに心惹かれていた。それゆえ、それらを守り保護することは彼女にとっては当然のことであった。また彼女が社会活動に熱中していく機会を与えたのも彼であった。しかし次第にその思想との軋轢が広がっていく。当初はオクタヴィアの住宅改良計画に賛同し援助していたラスキンであったが、それが都市の社会的危機を救うものたりえないという悲観論に達し、芸術至上主義へと回避する。セント・ジョージ・ギルドの計画はその結果である。オクタヴィアはあくまで実践主義的であり、ラスキンとのイデオロギーの相違は深まり、以後一緒に環境保護活動をすることはなくなるのである。

ラスキンの思想の影響のもと、環境保護活動に邁進していったオクタヴィアとモリスであるが、その思想に対する捉え方の違いが、彼らの活動の違いに繋がると考えられる。ラスキンの観念的な理論を、自分の芸術や芸術環境に取り入れ実践したモリスと、その思想傾向があまりにも観念的であるため、ラスキンとは袂を分けたオクタヴィア。ではこの二人がお互いの理論を直接に交換することはなかったのだろうか。モリスの著作や書簡からはオクタヴィア本人に関する言及は見当たらないが、オクタヴィアからシドニー・コッカレル (Sydney Cockerell, 1867-1962) への手紙の中にモリスに関する言及が見られる。コッカレルは、モリスが 58 歳の頃にハマスミスの蔵書の目録作成を依頼され、その後モリスの個人秘書となり、1894 年にはモリス経営の印刷会社であるケルムスコット・プレスの書記として、経営の仕事の大半をまかされていた。オクタヴィアはそのコッカレル一家とは旧知であり、彼はオクタヴィアの活動の協力者でもあった。コッカレルがオクタヴィアにモリスの著作を送ったことが書簡集からわかる。モリスの叙事詩『イアソンの生と死 (The Life and Death of Jason)』(1867) については、「その装飾も美しく、これぞ真の詩です」<sup>20</sup> と言っており、『ジョン・ボールの夢 (The Dream of John Ball)』(1888) についても「読み始めたけれど、時間がないので、早く続きが読みたい」<sup>21</sup> と書いている。しかし『ユートピアだより (News from Nowhere)』(1891) に関しては、「実践的な面が乏しく、意図はいいのですが、それ以外の何ものでもありません」<sup>22</sup> と批判している。モリスの『ユートピアだより』の中では、労働者階級というものは存在せず、誰もが喜んで様々な労働に従事している姿が描かれており、モリスの理想とする社会が表現されている。ロンドンの下層社会の人々の悲惨な生活環境を改善しようと、都市の中にオープン・スペースを確保する必要性を訴え奮闘していたオクタヴィアにとっては、モリスの理想社会は現実離れしたもので、モリスのこともラスキンの思想を信奉している理想主義者にしか映らなかったのかもしれない。しかし 1881 年 6 月 3 日付けの手紙には、モリスのカーペット工場や彼の書斎を訪問した記録があり、そこが「簡素で静かで美しく、まるで彼自身の家の庭のようでした」<sup>23</sup> と言っている。理想だけに終わらせないモリスの実行力には、オクタヴィアも感銘を受けたと思われる。モリスのマートン・アビィの工場は彼の理想を追求し、工場は温かく保湿され、可能な限り均一な温度に保たれ、労働時間は少なく、給与は平均水準よりも良く、工場の周りにはポプラの木が植えられていた。この工場には見学者がたびたび訪問しており、中には「大人のための大掛かりな幼稚園である」<sup>24</sup> と記されたこともある。モリスの熱意と意志が職人たちの幸福感と満足感を引き出していたからである。モ



リスは芸術至上の立場から、人間の労働を芸術の域にまで高揚させようとし、そのために労働条件の改善をめざし、職場環境の整備にも取り組んだのである。人道的立場から住宅改良家としての道を歩んだオクタヴィアとは、ラスキンの思想に対する捉え方の相違があったにせよ、その目指す高みは同じであり、お互いの活動を認め協力し合っていたといえる。オクタヴィアは「それらの美しい、遠くの静かな場所を、できるならばあなたがたの子供たちのために、そしてあなたがたの子供たちの子供たちのために残しておいて下さい」<sup>25</sup> と言い、これはモリスの「我々だけが、啓発的で由緒ある古建築物を保護し、後の世代に伝えることができるのである」<sup>26</sup> という SPAB のための宣言文の末尾の一節に通じるのである。

幼少の頃の体験が大きな原動力となり、人間福祉の観点から住環境問題、そして自然環境問題へと活動を発展させていったオクタヴィア・ヒル。芸術論の観点から、それを生み出す人間は幸福でなければならぬと考え、職場環境問題、そして自然環境問題に取り組んだウィリアム・モリス。経緯や動機、取り組み方、それぞれの活動に違いはあるが、二人の思想の根本に流れているのは、人間の本当の幸福とは何か、ということへの追求であり、探求であったといえる。産業・工業が著しく発展し、都市人口が急激に増加したヴィクトリア朝時代中期に、その弊害にいち早く気づき、人間本来の幸福を取り戻そうと力を尽くした人たちがいたことは、我々にとって重要であると同時に幸運でもある。それは現代社会に生きる我々への警鐘であり、これからの環境保護運動を充実させていく上での重要な指針となるからである。

#### 注

1. オープン・スペースとは、自然豊かな広大な土地のことで、入会地よりもさらに広い概念を有する。
2. 入会地とは、通常集落地と農耕地の周囲に広がっている野原や森林地で、荘園領主あるいは地主の私的所有地ではなく、近隣に住む人々の利用に供されるための共同所有地のことである。
3. 入会地保存協会とは、1865 年秋に、ロンドン周辺の入会地を含むオープン・スペースの囲い込みに反対するために組織された団体で、その目的は、恣意的かつ不法な囲い込みの根拠となっている法の廃棄と、人々の健康とレクリエーションのためにオープン・スペースを保全し、そのための規制計画を確立することであった。
4. Murphy, Graham. *Founders of the National Trust*. 1987. グレアム・マーフィ著『ナショナル・トラストの誕生』四元忠博訳、緑風出版、1992. p. 92
5. カール協会とは、1877 年に設立された、貧民区域の環境美化及び改善を普及推進する団体のこと。生涯と財産を Herefordshire の Ross で教会・病院の建設に捧げ、ローマ教皇から "Man of Ross" と称されたイギリスの慈善家 John Kyrle (1637-1724) にちなんで命名された。
6. Bell, E. Moberly. *Octavia Hill: A Biography*. London: Constable & Co Ltd., 1943. pp. 232-233. 1885 年 2 月のオクタヴィアからロバート・ハンター宛の手紙より。
7. ラファエル前派とは、ヴィクトリア朝中期にロセッティを中心にして、イギリスの青年画家・詩人たちによって生まれた、ルネサンス初期の理想に立ち戻ろうとする芸術革新運動のこと。
8. チンツ (chintz) は、光沢のある平織り綿布で、カーテン、家具カバー、服地などに用いられる。
9. Kelvin, Norman. ed. *The Collected Letters of William Morris. 4 vols.* Princeton, New Jersey: Princeton University Press. 1984. vol. 1, p. 351. フィリップ・ヘンダーソン著『ウィリアム・モリス伝』川端康雄、志田均、永江敦訳、晶文社、2000. p. 301. アシニアム誌、1877 年 3 月 5 日号へ

の投書から。

10. Ibid., p. 362. 『ウィリアム・モリス伝』 p. 302. 同 4 月 4 日号への投書から。
11. Morris, William. "Manifesto of the Society for the Protection of Ancient Buildings on its Foundation in 1877", Morris, May. ed. *William Morris: Artist Writer Socialist*. 2vols. New York: Russell & Russell. 1966. vol. 1, p. 110.
12. Morris, William. "The Aims of Art" *The Collected Works of William Morris*. 24vols. London: Routledge Thoemmes Press. 1992. vol. 23, p. 84. ウィリアム・モリス著 『民衆の芸術』 中橋一夫訳, 岩波書店, 1993. p. 45.
13. Morris, William. "Art, Wealth, and Riches" Ibid., p. 158. 『民衆の芸術』 p. 130.
14. Morris, May. ed. *William Morris: Artist Writer Socialist*. vol. 1, p. 193.
15. Kelvin, Norman. ed. *The Collected Letters of William Morris*. vol. 2, p. 128.
16. OSShomepage. Feb. 23. 2005,  
<http://www.oss.org.uk/features/morris/williammprris.htm>
17. Darley, Gillian. *Octavia Hill. Constable*, 1990. p. 306.
18. Morris, William. "The Art of the People" *The Collected Works of William Morris*. vol. 22, p. 42. 『民衆の芸術』 p. 25.
19. Morris, William. "Art and Socialism" Ibid. vol. 23, p. 209. 『民衆の芸術』 pp. 89-90.
20. Maurice, C. Edmund. ed. *Life of Octavia Hill as told in her letters*. London: Macmillan, 1913. p. 247.
21. Ibid. p.516.
22. Ibid. p.517.
23. Ibid. p.446.
24. リンダ・パリー著 『ウィリアム・モリスのテキスタイル』 多田稔, 藤田治彦共訳, 岩崎美術社, 1988. p. 17.
25. Hill, Octavia. *Our Common Land (and other short essays)*. London: Macmillan, 1877. p. 151. 『ナショナル・トラストの誕生』 p. 93.
26. Morris, William. "Manifesto of SPAB" Morris, May. ed. *William Morris: Artist Writer Socialist*. p. 112.

#### 参考文献

1. 大槻憲二著 『モリス (復刻版)』 (研究社英米文学評伝叢書 57) 研究社, 1980.
2. 小野二郎著 『ウィリアム・モリス研究』 (小野二郎著作集 1) 晶文社, 1986.
3. 木原啓吉著 『ナショナル・トラスト: 都市のジャーナリズム』 三省堂, 1984.
4. 木原啓吉監修・文/森下茂行写真, 『The National Trust: 市民が守る英国の環境と文化』 駸々堂出版, 1991.
5. 五島茂編 『ラスキン: モリス (世界の名著 41)』 中央公論社, 1971.
6. ボール・トムスン著 『ウィリアム・モリスの全仕事』 白石和也訳, 岩崎美術社, 1994.
7. フィリップ・ヘンダーソン著 『ウィリアム・モリス伝』 川端康雄, 志田均, 永江敦訳, 晶文社, 1990.
8. リンダ・パリー著 『ウィリアム・モリスのテキスタイル』 多田稔, 藤田治彦共訳, 岩崎美術社, 1988.
9. リンダ・パリー編 『ウィリアム・モリス: 決定版』 多田稔監修, 河出書房新社, 1998.
10. グレアム・マーフィー著 『ナショナル・トラストの誕生』 四元忠博訳, 緑風出版, 1992.
11. ウィリアム・モリス著 『民衆の芸術』 中橋一夫訳, 岩波書店, 1953.
12. ウィリアム・モリス著 『ユートピアだより』 松村達雄訳, 岩波書店, 1968.
13. ウィリアム・モリス著 『民衆のための芸術教育』 (世界教育学選集 63) 内藤史朗訳, 明治図書, 1971.

14. ウィリアム・モリス著『ジョン・ボールの夢』横山千晶訳、晶文社、2000.
15. ウィリアム・モリス著『ユートピアだより』川端康雄訳、晶文社、2003.
16. ジョン・ラスキン著『世界思想全集 61, 62』賀川豊彦訳、春秋社、1931, 1932.
17. ジョン・ラスキン著『風景の思想とモラル』内藤史朗訳、法蔵館、2002.
18. ジョン・ラスキン著『芸術の真実と教育』内藤史朗訳、法蔵館、2003.
19. 四元忠博著『ナショナル・トラストの軌跡：1895-1945』緑風出版、2003.
20. レイ・ワトキンソン著『デザイナーとしてのウィリアム・モリス』羽生正気、羽生清訳、岩崎美術社、1983.
21. Bell, E. Moberly. *Octavia Hill: A Biography*. Constable, 1943.
22. Darley, Gillian. *Octavia Hill*. Constable, 1990.
23. Faulkner, Peter. *Against the Age: An Introduction to William Morris*. London: George Allen & Unwin, 1980.
24. Henderson, Philip. ed. *The Letters of William Morris: To his family and friends*. London: Longmans, Green and Co., 1950.
25. Henderson, Philip. *William Morris*, Rev., ed. London: Longmans, Green and Co., 1963.
26. Hill, Octavia. *Our Common Land (and other short essays)*. London: Macmillan, 1877.
27. Hill, Octavia. *Homes of the London Poor*, New ed. London: Macmillan, 1883.
28. Hill, Octavia. *Letter to my fellow-workers*. Waterlow, 1883.
29. Hill, William Thomson. *Octavia Hill: Pioneer of the National Trust and Housing Reformer*. London: Hutchinson, 1956.
30. Kelvin, Norman. ed. *The Collected Letters of William Morris*. 4vols. Princeton, New Jersey: Princeton University Press, 1984-96.
31. Mackail, J.W. *The Life of William Morris*. New York: Dover Publications, Inc., 1995.
32. Maurice, C. Edmund. ed. *Life of Octavia Hill as told in her letters*. London: Macmillan, 1913..
33. Morris, May ed. *William Morris: Artist Writer Socialist*. New York: Russell & Russell, 1966.
34. Morris, William. *The Collected Works of William Morris*. 24vols. London: Routledge/ Thoemmes Press, 1992.
35. Morris, William. *Selected Writings*. Pickering & Chatto, 1996.
36. Parry, Linda. ed. *William Morris*. London: Philip Wilson/ V&A, 1996.
37. Ruskin, John. *Selected Writings*. (Oxford World's Classics) Oxford Univ. Press, 2004.
38. Thompson, E. P. *William Morris: Romantic to Revolutionary*. New York: Pantheon Books, 1977.